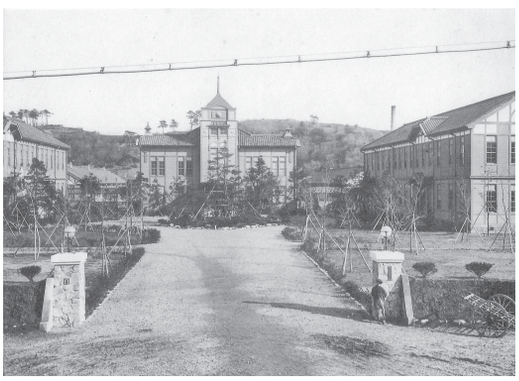
特集：横浜国立大学理工学部化学・生命系学科100年史

会誌グループ　藪健一郎

横浜国立大学理工学部化学・生命系学科は2020年創立100周年を迎えました。これまでの歴史を辿ります。

横浜高等工業学校設立

1920年（大正９年）１月に横浜国大理工学部の前身である横浜高等工業学校が設置され、４月に授業が始まりました。



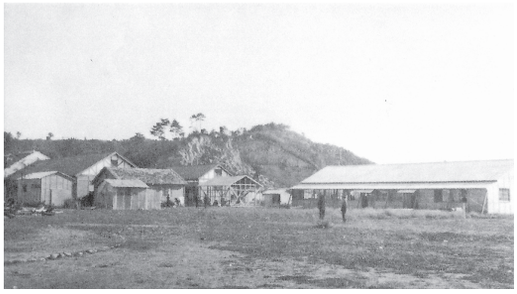
横浜高等工業開校当時の正門前から木造の本館を望む

初代校長には鈴木達治（煙洲）が就任しました。

鈴木校長は無試験、無採点、無賞罰の三無主義、自由啓発主義を掲げ、横浜高等工業の発展に尽くしました。当時の官制学校では珍しい制度で、各自の自覚、責任に直面しての自覚、研究に対しての自覚、困難に対しての自覚を要求し、放縦にならないよう学生の自覚を求めました。

1928年（昭和３年）度には入学試験にも無試験を導入、世間をあっと言わせたようです。もっぱら中学時代の成績と面接による結果を総合して判定したといいます。ただし、1937年（昭和12年）からは普通入試に戻りました。2021年度（令和３年度）入試で横浜国立大学が新型コロナウイルス感染を防ぐため受験生を集めての個別学力試験を取りやめると決めたのもこの伝統の影響があるのかもしれません。

横浜高等工業学校創立後わずか３年の1923年（大正12年）９月１日に関東大震災が発生、校舎はほぼ全壊しました。



関東大震災前の校舎

大震災で壊滅した校舎

９月21日には文部省が鈴木校長に横浜高等工業の名古屋移転を告げました。これに対し鈴木校長は「バラックでよいから、是非焼け跡で学校を復興したい」と嘆願し、結局その主張が通りました。

10月20日には教職員や学生たちの協力もあり焼け跡整理工事が終わり、11月１日から焼け残った校舎や急造のバラックで逐次授業が始まりました。

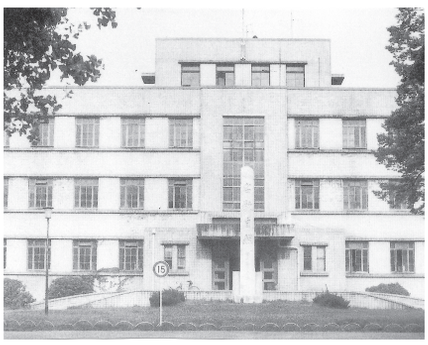
しかし、その後の緊縮財政のため、復興工事はなかなか予算が取れず、工事が完了したのは1937年（昭和12年）になりました。第一次世界大戦の好況から一転して戦後不況に陥り、関東大震災の発生でさらに企業や銀行が不良債権を抱え、取り付け騒ぎも起きたいわゆる金融恐慌の影響でした。

1935年（昭和10年）２月、鈴木初代校長は在籍15年を区切りとして校長を辞任し、二代目校長として冨山保が就任しました。

鈴木校長退任に際しては銅像建設などの意見も出ましたが、鈴木校長がそれを辞退、先生の希望で記念碑建設が決定しました。

弘明寺キャンパス時代、横浜高等工業（横浜国立大学工学部）正門を入ると玄関正面に「名教自然煙洲鈴木達治」と刻された高く大きな大理石の碑が

ありました。現在も常盤台キャンパス理工学エリアの中心に移設され、多くの学生、卒業生に親しまれている本校の象徴です。2000年（平成12年）には国の登録有形文化財になりました。



弘明寺キャンパスの名教自然碑（昭和52年）

常盤台キャンパスの名教自然碑（昭和53年）

1937年（昭和12年）11月１日、名教自然碑の落成式が横浜高等工業学校第17回開校記念式典後に弘明寺キャンパス正面玄関前で行われました。

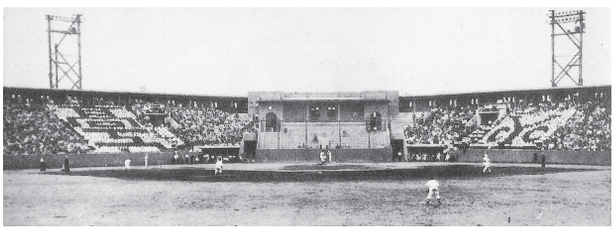
新校長に就任した冨山保は鈴木前校長の教育方針である自由啓発主義を受け継ぎました。

ただ、世の中は1931年（昭和６年）に満州事変が起き、1933年（昭和８年）には日本が国際連盟を脱退、1937年（昭和12年）盧溝橋事件で日中戦争が始まるなど戦時色が影を落とす時代に入っていました。

予算の関係で度々停滞していた復興工事は1935年（昭和10年）にようやく取り掛かることができました。横浜高等工業学校の本館、応化、電化実験工場など本工事は1936年（昭和11年）９月末に完工しました。ただし、内装が完備し全面使用可能になったのは1938年（昭和13年）７月でした。

当時は運動部の活動も盛んで、特に横浜高等商業との定期戦は野球、テニス、陸上競技、柔道、サッカー、バスケットボール、バレーボール、水泳、弓道と多岐にわたりました。

横浜高商との定期戦の模様



昭和10年頃の野球定期戦

山下公園前のボートレース（ホテルニューグランドが見える）

1938年（昭和13年）度からは戦争の影響で横浜高等工業３年生の授業は12月末で打ち切られ。早めに就職現場に送り込まれることになりました。

真珠湾攻撃で太平洋戦争が始まった1941年（昭和16年）には勅令で卒業式が12月に早められ、1942年（昭和17年）には更に早められ９月卒業になりました。

1943年（昭和18年）になると、多数の学生が学業半ばで入営し、海軍予備学生として卒業を待たずに入隊する人もいました。

1943年（昭和18年）の夏季休暇は８月の３週間でしたが、学徒動員令で学生は会社、工場に実習に出動しました。

1944年（昭和19年）の入試は３月に実施されましたが、受験生は空襲に備えて皆防空頭巾ゲートルに身を固めていました。

４月には「教育に関する非常措置策」として横浜高等工業学校は横浜工業専門学校に改称され、応用

化学科は化学工業科に改称されました。ただ、横浜工業専門学校という名称は学生の間では受けが悪く、横浜高工という旧名がいつまでも愛され使われたといいます。

５月20日に神奈川県下に初の警戒警報が発令されました。７月９日サイパン島が陥落、東条内閣が総辞職しました。11月末頃から空襲が本格化し、爆弾が京浜地区に落とされ始めました。

1945年（昭和20年）に入ると本土への空襲は絶え間なく続きました。２月に例年通り入学試験をしましたが、受験生は鉄かぶとと防空頭巾、巻脚絆で身を固める一方、学校も万一に備え試験問題など甲乙丙３種類用意し金庫に保管したといいます。４月２日に入学式は開きましたが、学生の勤労奉仕が続きました。４月４日には横浜で空襲がありました。

1945年（昭和20年）８月15日終戦。天皇の玉音放送の後、勤労動員されていた学生達は故郷に帰るなどしました。

８月15日未明、日本の全面降伏を知った一部陸軍将兵と横浜工業専門学校の学生が鈴木貫太郎首相を暗殺しようと、永田町の首相官邸で機銃掃射、小石川区丸山町の私邸を焼き打ちしました。鈴木首相は私邸を抜け出し無事でした。学生は鈴木前校長が会長を務める必勝懇談会の幹部でした。学生達は自首などし５年の刑を受けました。

1945年９月２日、米軍将校が横浜工業専門学校に来て、米軍が宿舎として校舎を接収するので、48時間以内に明け渡すようにと言い残していきました。米軍将校が来校した時は文部省に行っており不在だった冨山校長は３日県庁で外務省役人に面談、米軍将校を紹介してもらい、折衝の上、接収解除が認められました。

９月４日に至急開校し2, ３年生の授業を始め、15日からは１年生や２部の授業が始められました。３年生の授業は９月27日までで、29日には戦後初めての平和な卒業式がありました。ただ、採用中止が続出し、行く先の当てのない卒業生のうち半数は研究生として残ったといいます。停電や物資不足の中でも授業は続けられましたが、12月10日食糧難のため休校、1946年（昭和21年）２月１日授業再開になりました。

横浜国立大学工学部誕生

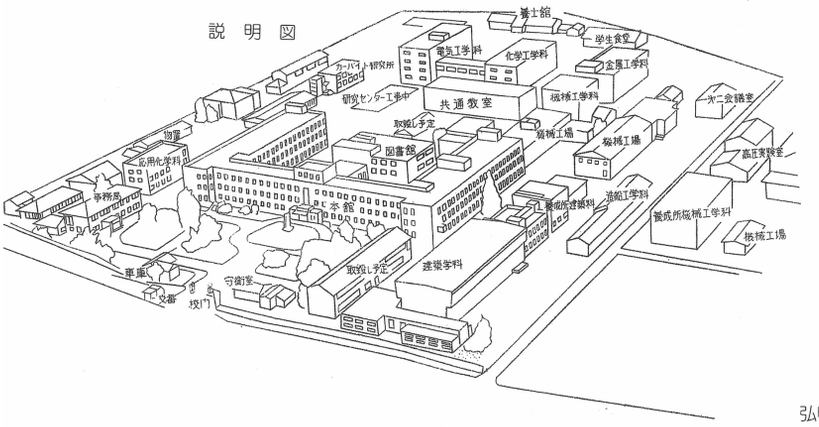
1947年（昭和22年）新制大学移行のための大学準備委員会を設置しました。当時は単科大学案で仮称横浜工業大学でした。しかし、1948年（昭和23年）５月19日には文部省が県下一本の総合大学設立の指令を出しました。７月に横浜工業専門学校、横浜経済専門学校、神奈川師範学校、神奈川青年師範学校は大学設置委員会に調書を提出しました。大学設置委員会は調書を審議し、９月に実地審査しました。

申請時には横浜大学を仮称としていました。ところが、市立の横浜経済専門学校と医学専門学校、私立の横浜専門学校が、いずれも横浜大学として申請していました。そこで審査員は三大学首脳を集め、相互協議の上、改めてそれぞれの名称を決めて再申請するよう求めました。1948年（昭和23年）10月に三者が協議し、横浜国立大学、横浜市立大学、神奈川大学として再申請することになりました。

1949年（昭和24年）３月に大学設置委員会で話し合われました。そこで大学名に国立と入れる点が問題になりました。東京女子高等師範学校が大学に移行する際、東京女子大学を考えましたが既に私立の東京女子大学があったため東京国立女子大学で申請しました。しかし、審議会はことさら国立と名称に入れることは適当でないとして、お茶の水女子大学として再申請した経緯がありました。しかし、冨山校長は横浜の特殊事情を説明し、国立と名称に入れることにようやく委員一同の了承を取り付けました。

こうして1949年５月31日に国立学校設置法により、横浜国立大学は学芸学部、経済学部、工学部の３学部をもつ新制大学として誕生しました。そして新制大学の学長には冨山保校長が就任、工学部長を兼任しました。

1949年５月に横浜工業専門学校は横浜国立大学工学部として新たに発足しましたが、横浜工業専門学校は1951年（昭和26年）３月に最後の卒業生を送り出すまで残りました。横浜高工（工専）の卒業生総数は7398名、そのうち化学工業科（応化）は1717名、電気化学科は1451名でした。1952年（昭和27年）夏に完全に大学に移行した姿を見て、65歳で富山学長は学園生活を退きました。



弘明寺校舎とその周辺
その頃には工業教員養成所があった（昭和40年頃）

弘明寺校舎とその周辺（昭和40年頃）と説明図

新制の横浜国立大学は弘明寺の工学部、南太田の経済学部、鎌倉や保土ヶ谷の学芸学部と別々のキャンパスで始まりました。新制大学第１回の入学試験は1949年（昭和24年）６月にあり、７月20日入学式が、11月３日には開学式が経済学部講堂でありました。

1962年（昭和37年）４月１日工学部に新たに化学工学科が設置されました。同時に従来の化学工業科を応用化学科に改称しました。

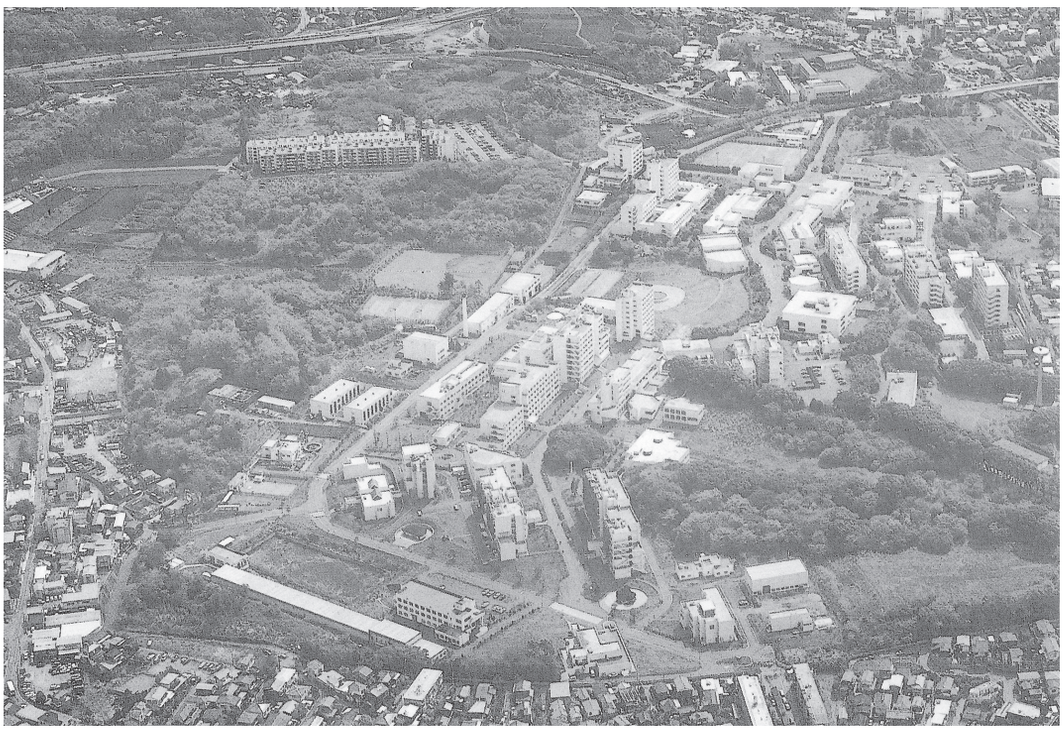
1963年（昭和38年）４月に工学部に大学院工学研究科が設置されました。大学院修士課程は応用化学専攻８名、電気化学専攻８名など定員は58名でした。６月28日に大学院初の入学式が開かれました。1965年（昭和40年）３月18日には第１回大学院修了式が開かれ応化１、電化１、機械１の３名に学位記が授与されました。

常盤台キャンパスへの統合・移転

1965年（昭和40年）４月保土ヶ谷ゴルフ場が他に移転する計画があることを知り、横浜国立大学を統合する最有力候補地にしました。1966年（昭和41年）６月、大学の評議会で保土ヶ谷ゴルフ場跡に大学を統合することを決定しました。1968年（昭和43年）５月には保土ヶ谷ゴルフ場跡地約12万坪（39万6000平方メートル）を国有地にしました。

ただ、1968年（昭和43年）から1969年（昭和44年）暮れにかけ学園紛争がありました。1969年に入ると大学と学生の団交が行われましたが、対立も深まり、学長、工学部長が体調を崩したこともあり辞任する事態を招きました。学生側は工学部では１月31日から無期限ストライキに入り、２月１日には全学封鎖となりました。封鎖とともに教官は学内に入れなくなり、事務室は横浜市立横浜工業高等学校寿分校に移転し事務を取りました。

全学封鎖中に度々ぼやが起こるなどし、封鎖を解



統合なった常盤台キャンパス　南西方向からの眺望（昭和58年）

かざるを得ないと大学は判断し1969年７月25日に機動隊約500名を導入し封鎖を解除しました。

学園紛争により常盤台キャンパスへの学舎統合は一時的に停止されましたが、紛争解決後の1969年（昭和44年）末から統合に向けて再び動き始めました。

1974年（昭和49年）には清水が丘地区にあった教育学部、経済学部、経営学部、附属図書館等が常盤台キャンパスの真新しい白い校舎に移転しました。そして1979年（昭和54年）８月16日に工学部の応用化学科、材料化学科、第二部応用化学科等が弘明寺キャンパスから常盤台キャンパスに移転しました。この年の４月には電気化学科が材料化学科に改称しました。

1985年（昭和60年）４月に応用化学科、材料化学科、化学工学科、安全工学科、第二部応用化学科にエネルギー材料研究施設を組み入れ、物質工学科に改組しました。物質工学科は物性化学、合成化学、材料化学、化学プロセス工学、安全工学、エネルギー工学、生物工学の７つの教育研究分野体制になりました。また、この年に大学院工学研究科に博士課程を設置しました。

常盤台キャンパスの物質工学科棟（昭和61年）

1998年（平成10年）４月には機能物質化学大講座、化学生命工学大講座、化学システム工学大講座、環境エネルギー安全工学大講座の４つの大講座体制になりました。2007年（平成19年）４月には化学コース、物質のシステムとデザインコース、バイオコースの３コース制になりました。また、この年工学部第二部応用化学科の募集を停止しました。

2011年（平成23年）４月に工学部を理工学部に改組、物質工学科は化学・生命系学科になりました。

「横浜国立大学工学部五十年史　大正９年～昭和45年（1920 ～ 1970）」
「希望の光　みはるかす」1987年11月
などを参考にさせていただきました。

横浜国立大学理工学部化学・生命系学科100年史

1920年（大正９年）１月　横浜高等工業学校設置

• 本科（修業年限３年）応用化学科、電気化学科、機械工学科の３科を設置

1920年（大正９年）４月　横浜高等工業授業開始

1920年（大正９年）10月　横浜高等工業開校式

• 初代鈴木達治校長、自由主義と三無主義を宣言

1923年（大正12年）３月　横浜高等工業学校第１回卒業

1923年（大正12年）９月　関東大震災で校舎ほぼ全壊

1923年（大正12年）11月　焼け残りの校舎・仮設校舎で授業再開

1925年（大正14年）10月　同窓会「横浜工業会」発足（1930年、社団法人化）

1928年（昭和３年）　入学試験にも無試験制度を導入（1937年からは普通入試に戻った）

1936年（昭和11年）９月　第３期復興工事で本館完成（内装は1938年７月）

1944年（昭和19年）４月　横浜工業専門学校と改称

• 本科に化学工業科、電気化学科、機械科、建築科、造船科、航空機科を設置

1945年（昭和20年）９月　終戦後の授業再開

1947年（昭和22年）８月　大学設立準備委員会発足（大学仮称：横浜工業大学）

1948年（昭和23年）５月　文部省より指令、総合大学案へ変更

1949年（昭和24年）５月31日　新制横浜国立大学発足

• 旧制横浜工専は工学部（化学工業科、電気化学科、第二部化学工業科等）の母体として設置

1951年（昭和26年）３月　旧制横浜工業専門学校廃止

1962年（昭和37年）４月　化学工業科を応用化学科と改称。化学工学科設置

1963年（昭和38年）４月　大学院工学研究科（修士課程）設置

1977年（昭和52年）４月　電気化学科を材料化学科と改称

1979年（昭和54年）８月16日　応用化学科、材料化学科、第二部応用化学科等が弘明寺から常盤台キャンパスへ移転

1985年（昭和60年）４月　応用化学科、材料化学科、化学工学科、安全工学科、第二部応用化学科にエネルギー材料研究施設を組み入れ、物質工学科に改組

• 物質工学科は７つの教育研究分野体制に（物性化学、合成化学、材料化学、化学プロセス工学、安全工学、エネルギー工学、生物工学）

大学院工学研究科に博士課程を設置

1998年（平成10年）４月　４つの大講座体制に（機能物質化学大講座、化学生命工学大講座、化学システム工学大講座、環境エネルギー安全工学大講座）

2007年（平成19年）４月　化学コース、物質のシステムとデザインコース、バイオコースの３コース制に

工学部第二部の募集停止

2011年（平成23年）４月　工学部を理工学部に改組、物質工学科は化学・生命系学科に